
僕とおかんと狂気の父 ?

クレイジーダディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とおかんと狂気の父 ？

【Nコード】

N5307BA

【作者名】

クレイジーダディ

【あらすじ】

前回までのあらすじ

やあ、僕はダイキ。

十五歳の誕生日に父がくれたのは、母を取り込んで完成した超汎用人型兵器、オカンゲリオン。

ええっ、これに乗れってどういう事よ？おまけに、敵はデブルガンダムに取り込まれた兄ちゃん？

兄ちゃんを引きこもり部屋から引きずり出すその日まで、俺の戦

いは終わらないっ！

さあ、我が家の平和を取り戻すその日まで、戦うんだ、俺！

今回は学園モノか？の巻

「何やってんですか！」

俺は父が掲げているプラカードを奪い取り、叩き折った。

「完璧に俺のキャラが崩壊してるじゃないですか。大体、誰に向けての文章なんですか、これ？」

「ううう、前回を読んでないドクシャさまに？」

「わけの解らないメタはやめて下さいよ！」

俺に一喝されて、父はオカンゲリオンの巨大な足元にすがりついた。

「母さん、ダイキがいじめるよう……」

（まあ、あの子も反抗期ですからねえ。）

改めて自己紹介しよう。俺はダイキ、ごく普通の十五歳だ。

ちょっと父がクレイジーだったり、ちょっと母が規格外のデカさだったり、兄の引きこもり部屋がMSだったりする以外は、ごく普通の家庭で育った、ごく普通の中学生だ。

「自分だつてメタ……」

「残念でした、カツコに入れなければメタ『発言』じゃないんです。」

（まあ、まあ、喧嘩しないで。）

オカンゲリオンは大きな指で俺をつまみ上げた。

（ほらほら、遅刻しちゃうわよ。）

母は俺の口にトーストを突っ込んだ。

「あー、いいな。母さん、わしも。」

（もう、父さんったら、甘えんぼ？）

バカッフル漫才に付き合っている余裕はない。

俺はカバンをひつつかむと、表へ飛び出した。

早足で歩く通学路には、すでに制服を着た学生の姿は無い。やはり。あと五分早く起きるべきだった。

近道をしようと通学路を外れ、公園を横切ろうとした俺は、滑り台の上に学ランを着た人物を見つけてしまった。

あちゃ〜、面倒なことに……

「おい、ダイキ、早くしないと遅刻するよ?」

レポート用紙の束を抱えて、人懐っこく手を振っている彼は幼稚園からの幼馴染だ。知らん顔するわけにもいかない。

「ユウト! お前だって遅刻するだろ。こんなところで何やってんだよ。」

「んー、宇宙の収縮率から見たこの公園の消滅点を計算したくなっちゃってね。」

超がつくほどの天才児である彼の言う事は、俺には全く理解不能だ。

「それはまた今度にして、学校に行こう?」

「いいよ。ちょうど最期の証明も終わったところだしね。」

俺はユウトを引きずるようにして走り出した。

何とか遅刻だけは免れた。急いでユウトの机の上を整えてやる。

「一時間目は国語だぞ。お前、国語の教科書は?」

「ああ、国語。そっか、国語ね。」

頼むから、そう言えばそんな教科もありましたね、みたいな顔しないでくれよ。それでなくても、あの先生に目をつけられてるんだからさ、お前は。

「別に、日本語なんか解らなくても、日常生活に困らないし?」

ほう、今お前が話している、それが何語か言ってみろ!

そうしている間にも、始業の時間は迫ってくる。俺はガコンと机をひっ付け、俺の教科書を真ん中に広げた。

「なんだ、また教科書を忘れたのか。」

嫌みの好きな国語教師は、教室に入っつてすぐに、ユウトに目を付

けた。

「違うんですよ、先生。忘れたのは僕の方で……」

「グズがグズをかばうから、こいつがますますグズになるんだぞ。」

『うまい事言っただろ?』と言いたげな視線に、クラスのあちこちでお義理の笑い声が上がった。俺もお義理と愛想を込めてヘラリと笑う。

ユウトだけは違った。すつくと立ち上がり、

「先生、僕の友人を愚弄しましたね?」

「あ? 愚弄もするさ。先生は苦労しているからな。お前、この前のテストも白紙で出しただろう。」

「それは、正解がなかったからです。」

「正解がない? そんな訳がないだろう。」

次の文章を読んで、選択肢の中から作者の気持ちに最も近いものを選びなさい。

ア 戦争の愚かさというものは文筆に表しきれないものである。

イ 戦争による損失は物的なものだけではない。

ウ 私をここまで育ててくれたのは皮肉にも戦争体験である

さあ、正解はどれでしょう? それとも天才君は『消去法』とかつて知らないのかなあ。」

「ふん、愚直な。この作問者は、作者にインタビューでもしたんですか? それとも、作者が直々に問題を作ってくれたとか?」

「へ理屈はいらない! 正解はどれかと聞いているんだ。」

「正解……正解が聞きたいんですか。」

ユウトの瞳が怪しく光るのを、俺は見逃さなかった。やばい! ユウトのやつ、アレをやる気だ……。

「教えてあげますよ、正解を。そして、お前の人生の間違いを……」

「ちよつと待ったターックル!」

俺は先生に詰め寄ろうとするユウトを思いつきり突き飛ばした。

「先生! 今ので、俺もこいつも怪我をしました。保健室へ行つてき

ます！」

俺はユウトを引きずるようにして教室を飛び出した。

今回は学園モノか？の巻（後書き）

あとがきドラマ

兄ちゃんの就職

あーあ、この引きこもり部屋サンクスチユアリから出るなんて、考えたくもない。
オレは求人誌のページをめくった。
ん？自家用車での出勤可？ダブルガンダムは自家用車に入るのか？

女教師も出してみました！の巻

「あんな奴、洗脳してやればよかったのよ！それで、あんなことやこんなことさせちゃったりして……」

当校の美人保健医、楓先生は大口を開けて笑い飛ばした。

「見たかったな、ユウト君の、他人を洗脳する程度の能力。」

「いや、こいつの洗脳はマジしゃれにならないですから。」

当のユウトはというと、ベッドの上にレポート用紙をぶちまけて何かを計算している。

「今日は何を計算しているのかな？天才君は。」

数少ないユウトの理解者である楓先生。彼女にはユウトも安心しきった笑顔を見せる。

「タイムマシンのもととなる、時間軸の簡単な計算ですよ。」

「面白そうね。でも、学校からのお知らせをメモ代わりにしちゃダメよ。」

レポート用紙にまぎれていたそのプリントを、彼女はつまみあげた。

「明日の授業参観のお知らせね。お家の人に見せなかったの？」

「ええ、どうせ、誰も来てくれませんから。」

それだけ言い放つと、ユウトは再び計算に没頭し始めた。

俺は楓先生を保健室の外まで連れ出した。

「あいつには『優等生』のアニキがいましたね。両親とも、扱いにくい『天才』よりも、どっちかって言うところ……ねえ。」

「もしかして、ユウト君のことは放って置きっぱなし！？あんなに美味しそ……才能あふれるコなのにな！」

俺は保健室の中をのぞき見た。両親からは厄介者扱いされ、友だちからは変人扱いされ、先生からは敵視される。それでも、ただひたすら数式をつづり続けるユウトは、寂しくは無いんだろうか。

「『天才』って、そんなにいけない事なんですかね？」

俺は我が家のお気楽な『天才』の事を思い浮かべていた。あいつに頭を下げるのはしゃくだが、仕方がない。俺の計画には、どうしてもあいつが必要だ。

家に帰った俺は、父の前に頭を下げた。

「ロボットを一体作ってください。」

「えー、何用？全長は何メートル欲しい？」

「そんなでかいサイズじゃなくて、普通の人間ぐらいの……ユウトの母親そっくりにお願いしたいんだけど。」

「そんな小さいのは専門外なんだがなあ。」

父は不服そうに、それでもラボに向かった。が、すぐに戻って来て、

「じゃあさ、せめて十万馬力にしてもいい？」

「お願いだから、普通の人間っぽく作ってください。首が取れるとか、パトカーを見ると破壊衝動にかられるなんてのも、やめて下さいよ。」

「それじゃ、まるきり普通じゃん。」

父は本当に不服そうだった。

女教師も出してみました！の巻（後書き）

あとがきドラマ

兄ちゃんの就職

俺はとりあえず、ある会社の面接を受けることにした。

意地の悪そうな面接官が、ダブルガンダムをじろりとにらんだ。

「ずい分と変わった格好ですね。面接にはスーツだと言う常識は無いんですか？」

「はい、だからモバイル『スーツ』です。」

「ふうん？」

何だかこいつ、嫌いだ。

おかんが学校のやってきた！の巻

朝から快晴。この上ない授業参観びより。

ま、天気は授業参観に関係ないんだけどね。

いまさらになって、俺はこの計画にたった一つだけミスがある事に気がついた。

二階の教室を窓から覗き込む巨大な母親……

(ダイキ〜?)

……しまった！母さんに『来るな』って言うの忘れてた！しかも、何で父さんまで肩に乗っけてるの？

教室の後ろで、母親たちがざわめく。

……あの巨大兵器が母親だなんて、クラスメートたちにどう説明しよう……

最初に口火を切ったのは、母とは以前から親しいマエジマ君のお母さんだった。

「あの……奥さん、やせました？」

(やったー、解ります?)

……その程度なんスか？もしかして、あのオカンが超巨大兵器に見えるのって、俺だけ？

ハハオヤ、sはダイエットの秘訣を聞くべく、オカンゲリオンの周りに集まってくる。後はもう、ダイエットの失敗談だの、成功談だの、子供そつちのけで盛り上がっている。

それは、国語の教師が入ってくるまで続いた。

厭らしい咳払いで母親たちを黙らせた国語教師は、もったいつけた挨拶の言葉を吐き出した。

「ご父兄の皆さま、お忙しい中をお集まりいただきありがとうございます。ございます。まあ、若干名、家族の誰も来てくれない可哀そうなコがいるようですが……」

国語教師の侮蔑の眼差しは、明らかにユウトの方を向いている。

……く！間に合わなかったのか？何をしているんだ、父さんは……
振り向いた俺の視線の中で、父が親指を突きあげた。その手には
二本のレバーがついているだけの、ラジコンのプロポをチャチくし
たようなコントローラーが握られている。

『行け、テツジン、ユウトのオカン！』

ガラリと教室のドアが開いて、上品そうな女性が入ってきた。

「遅れて申し訳ございません。ユウトの母でございます。」

優雅なお辞儀のしぐさ、シャナリとした足取り……あんなコント
ローラーでどうすればこんな複雑な動きができるのか、後で父に聞
かなくては……ともかく、俺の計画は成功した。ユウトは感動した
ようにつぶやいた。

「母さん……！」

「良かったな、ユウト。まじめなところ、見せなくちゃな？」

「……うん。」

『ユウトの母』は優しい笑顔を浮かべ……あらぬところ（ご想
像にお任せします）から電源コードをひっぱりだした。

「すみませんねえ。急作りのものですから、バッテリーが弱くって
電源、お借りできますかしら。」

……台無しだ〜！

落胆する俺の背後で、再び教室のドアが開いた。

「遅れちゃってすいませ〜ん。ユウトの母です。」

……何やってんですか、楓先生。ツラとメイクでごまかしても、ば
ればれですよ。

「だって、ユウト君に元気になってもらいたかったんだもん！」

国語教師が吠えた。

「貴様らあ！俺の授業をなんだと思っているんだあアアア！」

筋肉が膨張し、着衣はびりびりに飛び散った。

「貴様、天才児だかなんだか知らんが、ここまで俺を愚弄するとは
……覚悟はできているんだろうな。」

マッチョと化した国語狂師が、ユウトににじり寄る。

その間に、『ユウトの母』が立ちふさがった。

「うちのユウちゃんに文句があるのなら、まず私を……」

ゴシャアア、グシャァー！

派手な音とまき散らされる金属片の中、『ユウトの母』は母親の顔を持つスクラップへと姿を変えた。

「ユウ……ちゃん……」

ユウトはスクラップとなったそれに駆け寄り、両ほほを優しく両手で支えた。

「母さん、ありがとう、母さん。あんたは間違いなく、僕の母さんだ。」

『ユウトの母』は短すぎる人生を終えるその刹那、何かの液体を両の眼から流した。

「ふははははあ！貧弱、貧弱うう。」

国語狂師の暴走は止まらない。

今度は楓先生がその前に立ちふさがった。

「ユウト君に手を出すのなら、この私が！」

「どいてください、楓先生。」

ユウトが静かな声でそれを制した。

「今までがまんしてたけど、あんたがこれ以上、僕の大切な人たちを傷つけるつもりなら、もう遠慮はしない。」

ユウトの瞳が怪しい黄金色に輝く。国語狂師が、何かに縛られたようにその動きを止めた。

「ぐっ……」

「今、あなたは筋肉の一片に至るまで僕の支配下にある。解りますか？心筋の一筋に至るまで、僕の物だつてことですよ。」

ユウトの瞳の輝きが、さらに強くなった。

「全身の筋肉よ、わが命のままに、弾け飛……」

ズダアアアアン！

巨大な手のひらが、教室の壁を突き破って狂師とユウトの間を分けた。

(ユウちゃん、そこまでよ！ちゃんと席について、教科書を広げなさい！)

ユウトは子供のような狼狽した表情を一瞬浮かべて、しかし、その言葉に素直に従った。

(さて、先生？)

母は、今やすっかり縮こまってしまった国語教師に微笑み掛けた。
(ユウちゃんは小さいころからうちに遊びに来ている、家のもう一人の息子みたいなものです。この子に何かいけないところがあるのなら、そんないじめるようなことしないで、私に言ってください？)
「は、はひいひい……」

今日だけは、その巨大装甲並みに大きなうちの母の愛に、ちょっとだけ感謝した。

おかんが学校のやってきた！の巻（後書き）

あとがきドラマ

兄ちゃんの就職

「マサチューセッツを飛び級で卒業して、その後はとある研究機関に二年……素晴らしい経歴ですね。でもそのあと日本に帰って来て二年。この空白の期間は、何をされていたんですか？」

うつつ、なんか答えなくては……引きこもりをつまぐ正統化する何かを……

「ネット世界の構造と、マーケティングの研究を……」

「引きこもっていたんですね。」

やっぱり、こいつ嫌いだ。

そして完結へ……

授業が終わると、ユウトが俺と楓先生のそでを引つ張った。

「二人とも、今日はありがとう。家の両親は僕の事が嫌いみたいだけど、二人がいるから僕は……」

「なに、何？私たちがいるから？」

楓先生、素直じゃない年頃の男の子をそんな風にあおっちゃあ……

「……やっぱり、何でも無い。」

ほら、いい感じでツンつちゃった。

いいよ、ユウト。お前の言いたいことは解るし。

俺は何も言わずに、ちょっとひねくれた友人の頭をわしわしとなでまわしてやった。

そして完結へ……（後書き）

あとがきドラマ

兄ちゃんの就職

「では、引きこもってしまった理由をおっしゃってください。」

「そんなプライベートまで言わなきゃならないんですか？」

「ええ、あなたの人となりを知るための情報ですからね。」

「うっ……当時付き合っていた彼女に、KIIMOTAと言われたからです。」

「ふう、トウフみたいなメンタルですね。」

俺の中で何かが限界を迎えた。

……この日、日本経済から一つの企業が消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5307ba/>

僕とおかんと狂気の父 ？

2012年1月15日00時48分発行